

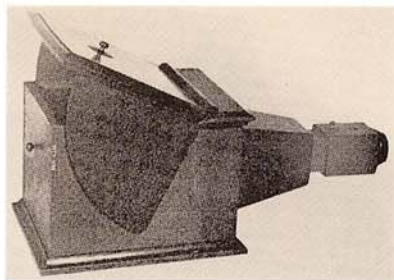
油彩

(テンペラ併用)

ランプの光を描く①

三浦明範の静物画講座

みづらあきのり、1900年秋田、東京学芸大学卒、文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品、文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
 ~97) 春陽会会員



〔図1〕カメラ・オブスキュラ

〔図2〕フェルメール
「赤い帽子の少女」 1666~67年頃、
23×18cm

■「見る」のしくみ

私達が「モノをみる」と書く時

「見る」のほかに、「観る」、「看
る」、「視る」、「診る」など、様々な
字を使います。同様に英語でも、

see look watchなどの表現があ
り、「みる」という行為には、幾つ
かの姿勢があることがわかります。

眼そのものの仕組みはカメラと
同じで、レンズを通過した光が網
膜上に像を結びます。そこから視
神経を通じて脳に伝達されるので

ですが、ここからカメラと違う所
なのです。脳のメカニズムは、ま
だ完全には解き明かされていませ
んが、少なくとも、この情報は直

線的に脳の視覚野に像を伝達して
いるわけではなく、他の部位と複
雑に接続しながら伝わっているら
しいのです。その結果、眼から入

ってきた情報はそのまま認識され
るのではなく、他の情報が加わっ
た上で修正され、あたかもそれが

眼から入ってきたものとして、「み

た」と判断されているのです。

たとえば、「幽霊の正体見たり枯
れ尾花」ということがあります。
幽霊と信じている人にとっては、

「幽霊」以外の何者でもありませ
んが、それを信じていない人にと
っては、「枯れ尾花」でしかありま
せん。また、「幻覚」ということも

あります。眼からの情報が無いの
にもかかわらず、見ているという
認識をしようとするのです。

これらは少し極端な例ですが、
何も特別な人にもみ起ることでは
なく、多かれ少なかれ万人に起こ
る、通常の脳の働きなのです。す

なわち、私達がいわゆる「みる」
ということは、眼はもちろん、経
験や記憶、さらには感情や他の感
覚も働かせ、視覚として感じたこ
とを「みた」として判断して

いるのです。
このような他の情報を積極的に
取り入れて「みる」行為を、「観
る」という字を当てはめて表現し
ているのです。受動的に「見る」

のではなく、能動的に「観る」の
です。

■絵を描くこと

野球を観戦する(＝観る)楽し
さは、ひいきのチームや選手(＝
他の情報)があるからで、これが
なければ「見て」いても面白くあ
りませぬ。

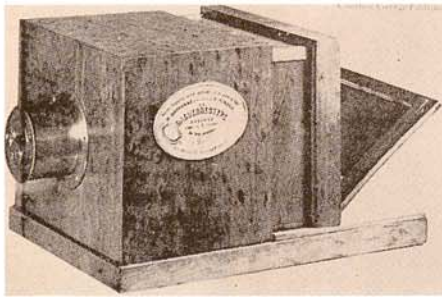
同様に、絵を描くことの面白さ
は、この「観た」ことを表現する
ことの面白さなのです。

たとえば、テーブルにコーヒー・
カップがあるとします。それを何
人かでスケッチするとしましょう。
出来上がった絵は、もちろん全員
が違います。

通り一遍のコーヒー・カップと
テーブルを描く人がほとんどでし
ようが、ある人はカップに描かれ
た模様に興味を持ち、他はそっち
のけで熱心に模様を描くかもしれ
ません。また、ある人はテーブル
に映る影の方が面白く感じたり、
あるいはコーヒーそのものに興味



(図4) グスタフ・モロー 「吟遊詩人」1981年
元になった写真とデッサン



(図3) ダゲレオタイプ



(図5) リチャード・エステス 「バス・リフレクションズ(アンソニア)」1972年
101.6×132.1cm

を抱き、専ら液体の質感を追究する人もいたりするでしょう。また、視覚的なことより、その香りやその場に流れる音楽の方に興味を持ち、それらのハーモニーを表現する人もいたりするかもしれません。さらには、コーヒー豆の産地にまで、想像力を働かせる人だっているかもしれないのです。

これらは、その人が生きてきた中での上での経験を通して感じたこと、すなわち、全人格を持って「観た」ことなのです。

■写真について

かつて、絵画が唯一の画像記録手段であった頃、できる限り客観的な事実を再現しようとしてきました。そのため、画家たちは「カメラ・オブスキュラ」(図1)と呼ばれる、いわゆる針穴写真機のような装置を作り、投影された像をなぞって、より正確な絵を描こうとしました。一説には、フェルメールの、ビーズがこぼれるような光の表現が、カメラ・オブスキュラを通した光と同様であることから、これを使用したのではともいわれています(図2)。

そして、その後科学が発達して、1830年代には、フランスの画家ダゲールが「ダゲレオタイプ」

という、銀板写真の技術を発明します(図3)。その後も、多くの芸術家の熱意で改良が重ねられ、今日の写真技術が完成されていくのです。

このように、写真と絵画は、同じ「画家」達の手によって発展してきたものなのです(図4)。しかし写真が、ある意味で客観的事実を獲得してしまっただけで、画家達の仕事は、より主観性を重視したものに変わっていきました。そこで登場したのが印象派だったので

■リアリティについて

ところで、皆さんはスケッチなどに行くと、時間がなにか、面倒だとかいう理由で写真をスケッチ代わりに撮ってくることはないでしょうか。このことが、邪道だとか悪いとかいうつもりはありません。この時代にあつて、文明の利器を取り入れることは、むしろ有効な手段ともいえるでしょう。

しかし、私達が忘れてはいけません。それは、あたかもカメラが捕らえた事象が真実のように思っているのが、全くの錯覚に過ぎないということです。私達は、外界に氾濫する、テレビや写真などの映像によって、「レンズの眼で見る」よ

(図6) モチーフ写真1
ランプに絞りを合わせた写真。葡萄は、真っ黒なシルエットにしか写らない。全自動のカメラでは、大体このような写真になる。



(図7) モチーフ写真2
葡萄に絞りを合わせた写真。今度はランプが写っていない。



うに洗脳されているのです。

このことを問題提起したのが、70年代に登場した、スーバー（ハイパー）・リアリズムという運動でした(図5)。この画家達は、レンズの眼で描くという手法で表現したのです。これは、ポップ・アートの延長としての「大衆性」が根本にあります。写真を真実であるかのように思い込んでいる現代人への、逆説的表現でもあったのです。

それでは、レンズから入手された情報が真実ではなく、脳内で認識されたものも修正が加えられているとしたら、何が真実なのでしょう。この世界は単なる錯覚なのでしょうか。

これはもう、哲学の範疇で、人間の存在そのものの問題に関わることになるのです。ひとつの視点などでは、捉えることなど出来ないのです。結局、私達にとっての真実は、私達が、全人格を働かせて感じたことしかありえなくなるのです。

「リアリティ」というのはこのことを指している言葉で、単純に写真とか具象ということではなく、抽象やいわゆる現代美術にも絶対に必要な要素なのです。このことなしには、作品が人々に感動を与

えることはないのです。

■モチーフの設定

さて、今回は、葡萄を描いてみます。

本来なら、この季節には葡萄は実らないのですが、輸入品が回るようになり、最近是一年中スーパーに陳列してあるようになりました。これをコンポートに乗せ、雑貨店で見つけた花の形をしたランプの光で、描いてみようと思います。

人工光線になりますので、周りを暗くして余計な光が届かないようにします。画面が暗くなって手元がおぼつかないのが、このような設定では苦勞する点です。

ところで、このような設定のモチーフを写真にとってみましょう。大抵の人は全自動機能を持つカメラで撮りますね。そうすると、(図6)のようなものが出来上がります。ランプが光源ですから真っ白に、他はほとんど真っ黒で、何かなにやらわからなくなってしまうます。

少しカメラの知識がある人なら、モチーフに明るさを合わせて、絞りやシャッター・スピードを調節するでしょう。そうすれば、(図7)のようなものを撮ることも出

来ます。

しかし、今度はランプの方が真っ白に飛んでしまい、どんな形なのかわからなくなっています。

私は、この葡萄も、ランプの面白さも、どちらも描きたいのです。私の眼には、どちらも「観える」のです。

まさにこのことが、レンズ(眼)からの情報と、「観た」という認識の違いなのです。私の脳の中では、葡萄を見た記憶とランプを見た記憶は、同時に認識され、両方が「観えた」のです。

■制作

1 支持体には、今回もF10号大のMDFボードを使います。これにカオリン地を施します。

70gの膠に対し、1000ccの水で作った膠水に、カオリンをひたひたになるまで振り入れまます。これを下地塗料とし、縦横交互に6度塗りします。

2 デッサンをトレーシング・ペーパーに写し、裏に弁柄(注)を塗って転写します。この上から、墨を使ってアンダー・ドロウイングします(制作過程1)。

3 油彩ライトレッドに油メデイ

ウムを加え、テレピンで倍に希釈して塗布します。これで、有色下地(インブリミトウラ)と絶縁層(アイソレーション)の、二つの過程を同時に行います(制作過程2)。

4 テンペラ白で「浮き出し」を行います。ここでは単純に、白でデッサンをするような気持ちで描きますが、普通のデッサンと異なるのは、全体のバールを考えるのではなく、個々の部分での明暗を付けるということです。これは、この後に来る固有色が、各々の異なる明度を持つからです(制作過程3、4)。

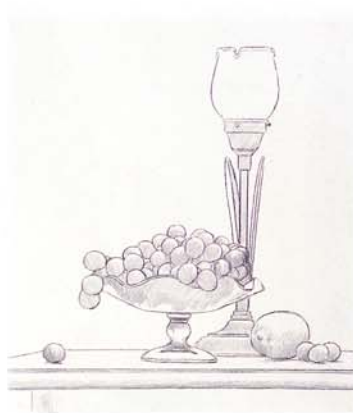
5 全体に油彩ヴェリジアンを、メデイウムを加えて塗布します(制作過程5)。これによって、ライトレッドの強い赤味を中和させると共に、混色効果でかなり暗い調子も出来上がります。

6 さらに、テンペラ白で浮き出しを行っていきますが、まだ途中の段階で終わりました(制作過程6)。

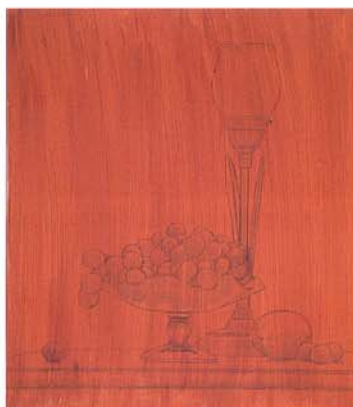
(注) 弁柄…酸化鉄を主成分とした顔料代碼(たいしや)。ライトレッド、ベネチアンレッド、インディアンレッドなどと同じ成分。



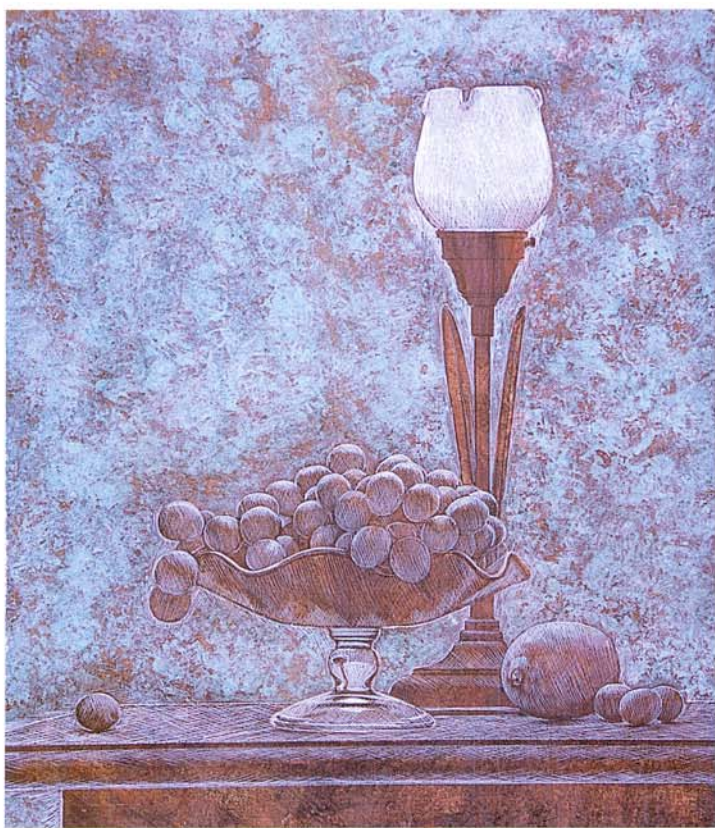
(制作過程5)
全体に油彩ウイリジアンを塗布。



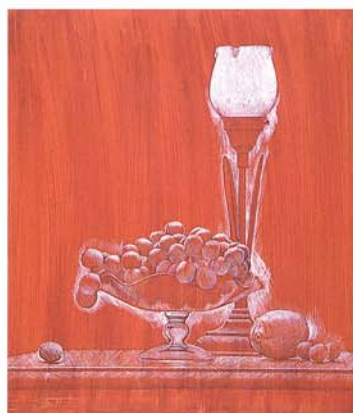
(制作過程1)
カオリン地を施したMDFに、墨でアンダー・ドロウ
インク。



(制作過程2)
油彩ライトレッドのインプリミトゥーラアイソレー
ション。



(制作過程6)
テンペラ白での浮き出し。



(制作過程3)
テンペラ白での浮き出し。



(制作過程4)
背景にもテンペラ白でマチエールの変化をつける。